

鹿児島県霧島市隼人町方言の自他交替¹

高城隆一

taki.ryuichi.0816@gmail.com

キーワード：鹿児島方言 隼人方言 形態音韻論 形態論 自他交替

要旨

本稿では、鹿児島県霧島市隼人町方言の自他交替についての調査結果を報告する。隼人方言において自他交替にかかわる形態統語論的手段としては、接辞の付加による派生（使役型・逆使役型）、語根末音素の交替（両極型）、語根の交替（補充型）の3種類がある。このうち接辞の付加による派生が全体の約8割以上を占めており、その中でも使役型が逆使役型より多く出現することを明らかにする。形態素境界と派生方向の分析に際して使役型、逆使役型、両極型で考えられる問題点を取り上げて、隼人方言における認定基準を議論する。さらに、2種類の母音 /e, o/ が出現する母音語幹の語幹末が基底において //e// であることを主張する。最後に、語幹の認定に際して問題が生じる動詞について、これらの動詞の共通点が「語幹の最終音素もしくは次末音素に /s/ を持つ」点であることを指摘し、語幹の表記方法を定める。

1. はじめに

本稿では、鹿児島県霧島市^{きりしま}内の旧隼人町^{はやとちよう}（図1）の伝統方言（以下、隼人方言）²における自他交替について検討する。Haspelmath (1993) が挙げている31の「起動動詞 (inchoative verb)」と「使役動詞 (causative verb)」のペアについて、臨地調査³で収集した非過去終止形（以下、非過去形）、過去終止形（以下、過去形）、非過去否定形（以下、否定形）の3つの形式を基に、各動詞対の形成に用いられる形態音韻規則と形態統語的手段を明らかにし、形態素境界や派生方向の認定方法について議論する。さらに、2種類の母音 /e, o/ が出現する母音語幹の語幹末が基底において //e// であることを主張する。最後に、動詞語幹の認定に際して問題が生じるものについて、これらの語幹の共通点が「最終音素もしくは次末音素に /s/ を持つ」点であることを指摘し、表記方法を定める。



図1 九州南部の地図

¹ 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」および、JSPS 科研費 17H02332、20J22969 の助成を受けたものである。本稿の内容については以下の方々から貴重なご意見および情報をいただいた：黒木邦彦、長屋尚典、松本曜（敬称略）。

² 霧島市の住民基本台帳人口によると、隼人地区の人口は令和2年4月1日現在で38,378人であり、霧島市全体において65歳以上の人口が27.4%である。このことから1万人程度の話者がいると推定できる。

³ 令和2年1月5日および2月13日に実施した。調査結果の一覧については稿末の資料1を参照されたい。

起動動詞と使役動詞のペアについて、Haspelmath (1993: 90) は (1) のように定義している。

- (1) [I]t is a pair of verbs which express the same basic situation (generally a change of state, more rarely a going-on) and differ only in that the causative verb meaning includes an agent participant who causes the situation, whereas the inchoative verb meaning excludes a causing agent and presents the situation as occurring spontaneously.

同じ基本的な状況（多くの場合は状態変化だが、非動作主的な動作のことも稀にある）を表現する動詞対であり、使役動詞の意味にはその状況を引き起こす動作主が含まれているのに対し、起動動詞の意味には動作主は含まれず、その状況が自然に生じたかのように表現される。（拙訳）

Haspelmath (1993) が起動動詞と使役動詞のペアの典型として挙げている例を (2) に示す。

- (2) a. (inchoative) The stick broke.
b. (causative) The girl broke the stick.

(Haspelmath 1993: 90)

(2) では、どちらの文でも **break** という動詞が使われている。ただし、(2a) の **break** は起動動詞として用いられており、(2b) の **break** は使役動詞として用いられている。(2) の例を (1) の定義に当てはめて説明すると (3) のようになる。

- (3) 両者は「棒が折れた」という同じ基本的な状況を表現する動詞対であり、(2b) において使役動詞の意味には「棒が折れた」という状況を引き起こす (=棒を折る) 動作主 **the girl** (女の子) が含まれているのに対し、(2a) において起動動詞の意味には動作主は含まれず、「棒が折れた」という状況が自然に生じたかのように表現される。

Haspelmath (1993) は、21 の言語における 31 の起動動詞と使役動詞のペアを主に辞書を用いて収集し、各言語の動詞対における形式的な派生関係を調べている。日本国内の言語については、Haspelmath (1993) の 21 言語の中に日本語共通語（以下、共通語）が含まれているほか、佐々木・當山 (2015) の北海道方言と沖縄語首里方言、横山 (2017) の奄美語沖永良部島国頭方言についての上述の動詞対を用いた研究がある。なお、Haspelmath (1993) では起動動詞と使役動詞の対立は、自動詞 (intransitive verb) と他動詞 (transitive verb) の対立とは（多くの場合には重なるが）異なるものであるとされている。しかし本稿では便宜上、Haspelmath (1993) の「起動動詞」を「自動詞」、「使役動詞」を「他動詞」と呼称する。

2. 自他交替にかかわる形態音韻規則と形態統語論的手段

本節では、隼人方言の自他交替動詞対の形成に用いられる形態音韻規則 (2.1 節) と形態統語論的手段 (2.2 節) について議論する。

2.1. 形態音韻規則

自他交替動詞対の例として共通語の「開く」に対応する動詞を (4) に、同じく「開ける」に対応する動詞を (5) 挙げる。それぞれ左から非過去形、過去形、否定形の順で音声表記と共通語訳を示す。3 節で提示する一覧 (表 4) では、この調査結果から抽出した語幹 (= 語根 + 0 個以上の派生接尾辞) を掲載している⁴。

(4)	a?	eta	akan
	開く	開いた	開かない
(5)	aku?	aketa	aken
	開ける	開けた	開けない

(4) の「開く」では語幹として //ak-// が抽出できる。このとき、非過去形では (6)、過去形では (7) のような形態音韻変化が生じていると考える。以下では適用される形態音韻規則の名前を、派生の方向を示す矢印の下に示す。[] は音声表記、// は音素表記、/// は基底形であることを表す。接尾辞の基底形において上付き文字で表している「連結音」の考え方は、清瀬 (1971) と黒木 (2015: 32-33) に倣っている。

(6)	//ak- ^h u//	→	/ak-u/	→	/at/	[a?] ⁵
	開く-NPST					
			連結音実現規則 (8a)		音節末子音化規則 (9a)	
(7)	//ak-ta//	→	/ai-ta/	→	/e-ta/	[eta]
	開く-PST					
			語幹末子音交替規則 (10a)		母音融合規則 (11a)	

(6) では、動詞語幹の //ak-// と非過去接尾辞の //^hu// から、形態音韻規則 (8) ~ (9) の適用により /at/[a?] が得られる。(8) の連結音実現規則では (8a) に示すように、連結子音「^c」は

⁴ /ju nat/[ju na?] 「良い.ADV なる.NPST」のように、回答が単独の動詞ではないものがある。この場合には語幹を表示する際に便宜上、動詞以外の部分も併記する。

⁵ 声門閉鎖音および、後続音節の頭子音と同器官的な音節末の阻害音 (共通語の「促音」と類似しているが、これと異なり有声阻害音や共鳴音の前にも現れる) は、音節末では対立しない (相補分布する) ことから、同一音素の異音であると考えられる。共通語の /Q/ のように音節末専用の音素を新規に立てるメリットが特に見当たらないことから、頭子音音素として既に存在する /t/ が音節末位にも立つと分析する。

直前の音素が母音である場合は子音「C」として実現し、子音である場合は実現しない。一方で(8b)に示すように、連結母音「V」は直前の音素が子音である場合は母音「V」として実現し、母音である場合は実現しない。

(8) 連結音実現規則

- a. $C \rightarrow C/V_ \rightarrow \emptyset/C_$ b. $V \rightarrow V/C_ \rightarrow \emptyset/V_$

非語頭の狭母音音節は(9)に示すように音節末子音化する⁶。子音部分が(9a)のように破裂音 /p, b, t, d, k, g/ の場合は /t/、(9b)のように摩擦音 /s, z/ の場合は /s~t/、(9c)のように鼻音 /m, n/ の場合は /n/、(9d)のようにはじき音 /r/ の場合は /t~j/ となる。

(9) 狭母音音節の音節末子音化規則

- a. $C[-son, -cont]V[+high] \rightarrow t/V_ \quad /ak-u/ \rightarrow /at/[a?] \text{ (開く-NPST)}$
 b. $C[-son, +cont]V[+high] \rightarrow s\sim t/V_ \quad /hanas-u/ \rightarrow /hanas/[hanas] \\ \sim /hanat/[hana?] \text{ (話す-NPST)}$
 c. $C[+son, +nas]V[+high] \rightarrow n/V_ \quad /jom-u/ \rightarrow /jon/[jon] \text{ (読む-NPST)}$
 d. $rV[+high] \rightarrow t\sim j/V_ \quad /tor-u/ \rightarrow /tot/[to?] \sim /toj/[toj] \text{ (取る-NPST)}$

(7)では、動詞語幹の //ak-/ と過去接尾辞の //ta-/ から、形態音韻規則(10)～(11)の適用により /eta/ [eta] が得られる。過去接尾辞が接続する際には語幹末子音が(10)に示すように交替する。(10a)の軟口蓋破裂音 /k, g/ と(10b)の摩擦音 /s/ は /i/ ⁷、(10c)の両唇破裂音 /b/ は /n/、(10d)の接近音 /w/ は /u/ となる。

(10) 語幹末子音交替規則

- a. $[-son, -cont, +dor] \rightarrow i/_-t \quad /ak-ta/ \rightarrow /ai-ta/ \rightarrow /e-ta/[eta] \text{ (開く-PST)}$
 b. $[-son, +cont] \rightarrow i/_-t \quad /ok-os-ta/ \rightarrow /ok-oi-ta/ \rightarrow /ok-e-ta/[oketa] \\ \text{(起こす-CAUS-PST)}$
 c. $[-son, -cont, +lab] \rightarrow n/_-t \quad /tob-da/ \rightarrow /ton-da/[tonda] \text{ (飛ぶ-PST)}$
 d. $[+son, -nas, +lab] \rightarrow u/_-t \quad /waruw-ta/ \rightarrow /waruu-ta/ \rightarrow /waru-ta/[waruta] \\ \text{(笑う-PST)}$

⁶ 通時的な変化として近隣の鹿児島市方言(木部2001)や内之浦方言(高城2019)でも類似の現象が指摘されている。このうち(9)に示すものは、単人方言と内之浦方言では共時的な規則としても成り立つことが筆者の調査によって明らかになっている。なお、実例の規則適用前の形式として挙げているものは必ずしも基底形ではない(以下でも同様)。

⁷ 摩擦音ではこの規則が適用されていないように見える例(/koo-as-ta/[ko:acta]「凍る-CAUS-PST」など)もある。この違いが何に起因するのかについては分かっていない。

現時点で判明している母音融合規則は (11) の通りである。代償延長は生じない。

(11) 母音融合規則

- | | | |
|----|------------|---------------------------------------|
| a. | /ai/ → /e/ | /ai-ta/ → /e-ta/ [eta] (開く-PST) |
| b. | /ei/ → /e/ | /ak-e-i/ → /ak-e/ [ake] (開く-CAUS-IMP) |
| c. | /oi/ → /e/ | /ko-i/ → /ke/ [ke] (来る-IMP) |
| d. | /ui/ → /i/ | /hiku-i/ → /hiki/ [hiki] (低い-NPST) |
| e. | /au/ → /o/ | /kak-au/ → /kak-o/ [kako] (書く-VOL) |

本節冒頭に挙げた (5) を再掲する。この「開ける」では、語根 //ak-// と使役接尾辞 //e-// が抽出できる。語幹は両者を合わせた //ak-e-// である。

- | | | | |
|-----|------|-------|------|
| (5) | aku? | aketa | aken |
| | 開ける | 開けた | 開けない |

このとき、非過去形では (12) のような形態音韻変化が生じていると考える。過去形では (13) のように形態音韻変化が生じずに基底形と表層形が一致する。

- (12) //ak-e-ʔu// → /ak-e-ru/ → /ak-e-t/ → /ak-u-t/ [aku?]
 開く-CAUS-NPST
 連結音実現規則 音節末子音化規則 語幹末母音交替規則 (49)

- (13) //ak-e-ta// /ak-e-ta/ [aketa]
 開く-CAUS-PST

母音語幹⁸の語幹末には、(12) のように非過去接尾辞など特定の接尾辞が付加される際に /e/ → /u/ の交替規則が適用される。詳細は 4.1 節で述べる。

上記のように非過去形や過去形では語幹末に生じる形態音韻変化によって、形態素境界や語幹末音素を表層形の観察のみに基づいて判別することができなくなっているものが多い。これに対して否定形は形態論的に比較的透明であるため、本稿では語幹を認定する際に主に各動詞の否定形を参照している。しかしながら、否定形の観察のみで語幹を1つに定められないものも散見される。これは、(14) のように2種類の否定形が観察されることによる。

- (14) a. [tokasan] ~ b. [tokasen] 「溶かさない」

⁸ 語幹末の音素が母音である語幹を「母音語幹」、子音である語幹を「子音語幹」と呼称する。子音語幹の下位分類として、語幹末が「C (=任意の子音)」であるものを指して「C語幹」と呼称することもある。

(14a) からは (15a) のように s 語幹と判断することができ、(14b) からは (15b) のように母音語幹と判断することができる。

(15) a. //tok-^sas-^an// → /tok-as-an/ [tokasan]
 溶ける-CAUS-NEG
 連結音実現規則

b. //tok-^sase-^an// → /tok-ase-n/ [tokasen]
 溶ける-CAUS-NEG
 連結音実現規則

本稿ではこのような動詞の語幹を /tok-as(e)-/ のように表記する。この表記法を採用する理由は 4.2 節で述べる。

2.2. 形態統語論的手段

隼人方言の自他交替動詞対の形成に用いられる形態統語論的手段として、接辞の付加による派生 (2.2.1 節)、語根末音素の交替 (2.2.2 節)、語根の交替 (2.2.3 節) の 3 つを提示する。

2.2.1. 接辞の付加による派生

語根に接辞を付加して派生させることによって自他交替ペアを作る動詞対には、使役型 (causative) と逆使役型 (anticausative) が存在する。使役接尾辞として (16) の 4 種類、逆使役接尾辞として (17) の 3 種類が見つかっている。

(16) -^sas(e)-, -^akas-, -e-, -os-

(17) -ar(e)-, -e-, -ae-

使役接尾辞による派生の例を (18) に示す。それぞれ左側が自動詞⁹、右側が他動詞である (以下でも同様)。語例の前の数字と英訳は 3 節の表 4 に対応している (以下でも同様)。形態素境界及び派生方向の認定方法については 3 節で議論する。

(18) a. 1 boil /wak-/ → /wak-as(e)-/ など
 b. 23 rock /jue-/ → /ju-akas-/ など
 c. 6 sink /sizum-/ → /sizum-e-/ など

⁹ より正確には「自動詞語幹」である。本稿では議論の都合上、屈折接尾辞が付加されていない「自動詞語幹」についても、理解に支障がない範囲で「自動詞」と呼称する。「他動詞」と「他動詞語幹」でも同様。

- d. 4 wake up /okir-/ → /ok-os(e)-/

使役接尾辞の出現数の内訳とその割合を表 1 に示す。接辞の前のアルファベットは (18) に対応している。Haspelmath (1993) に倣い、1 つの動詞について 2 種類の回答があった場合には各回答を 0.5 として計算する。3 種類の回答があった場合には各回答を 0.33 として計算する。以下では原則として少数第 2 位を四捨五入して表示する。

表 1 使役接尾辞の出現数の内訳と割合

接辞	出現数 (対)	割合 (%)
a. ^s as(e)-	9.3	62.0
b. ^a kas-	2.7	18.0
c. -e-	2.0	13.3
d. -os-	1.0	6.7
計	15.0	100.0

次に逆使役接尾辞による派生の例を (19) に示す。

- (19) a. 9 stop /tom-ar-/ ← /tome-/ など
 b. 12 burn /jak-e-/ ← /jak-/ など
 c. 30 split /wak-ae-/ ← /wake-/

逆使役接尾辞の出現数の内訳とその割合を表 2 に示す。接辞の前のアルファベットは (19) に対応している。

表 2 逆使役接尾辞の出現数の内訳と割合

接辞	出現数 (対)	割合 (%)
a. -ar(e)-	8.0	70.8
b. -e-	2.3	20.4
c. -ae-	1.0	8.8
計	11.3	100.0

2.2.2. 語根末音素の交替

語根末の 1~2 つの音素の交替によって自他交替ペアを作る両極型 (equipollent) の例を (20) に示す。(20a, c) では /t/ と /s(e)-/、(20b) では /e/ と /s(e)-/ が交替している。

- (20) a. 10 turn /mawar-/ /mawas(e)-/

- b. 13 destroy /utkuzue-/ /utkuzus(e)-/
 c. 18 roll /koogar-/ /koogas(e)-/

これらは同一の語根を基にした派生による交替ではないが、それぞれの動詞対において形態的な関係が明らかであり、この点で2.2.3節の補充型 (suppletive) とは区別される¹⁰。語根末音素の交替によって自他交替ペアを作るこの現象 (両極型) は、語根の交替の程度という基準を用いると、2.2.1節で示した接辞の付加による派生 (使役型・逆使役型) と、2.2.3節で示す語根の交替 (補充型) の間に位置づけられる (表 3)。

表 3 語根の交替の程度

	使役・逆使役	両極	補充
語根の交替	しない	一部分のみ	全体

2.2.3. 語根の交替

語根の交替、すなわち補充法によって自他交替ペアを作る補充型の例を (21) に示す。2.2.2節で見た両極型とは異なり、それぞれの動詞対の間に形態的な関係は見られない。

- (21) a. 7 learn/teach /manab-/ /itkas(e)-/
 b. 22 improve /ju nar-/ /ju s-/ ¹¹
 c. 31 die/kill /kesim-/ /utkoos(e)-/ ¹²
 d. 31 die/kill /sin-/ /koos(e)-/

3. 動詞のリストと派生方向の認定方法

隼人方言の自他交替ペア 31 対を表 4 に示す¹³。話者は旧隼人町出身・在住の昭和 9 年生まれ (調査時 85 歳) の男性 1 名である。表 4 中の「Type」において、C は使役型、A は逆使役型、E は両極型、S は補充型を表す。後述するように、形態素境界および派生方向の認定方法は共通語を扱った Matsumoto (2016) を一部参考にしてている。

¹⁰ これに類似したものとして、北サーミ語の自他交替についての梅田 (2018) の分析が挙げられる。梅田 (2018: 332-333) は、「同一語彙素からの派生とは考えられないが、明らかに自動詞と他動詞の間に形態的關係がみられる例」が北サーミ語に存在することを指摘し、「全く形態的に関係していない自動詞と他動詞のペアと比較すると、上記のような例は典型的な補充法とは言い難い」と述べている。

¹¹ 共通語に直訳すると「良くなる」「良くする」であり、動詞語根「なる」「する」の交替である。

¹² /ke-, ut-/ は動詞接頭辞であるが、使役性に影響を与えない語幹内部の形態素境界は、本稿では原則として明示しない。

¹³ 高城 (2020) のリストにおける有標な形式のセルに色を付けた。

表 4 隼人方言の自他交替ペア 31 対一覧 (高城 2020)

	Verb	Non-causative	Causative	Type
1	boil	wak-	wak-as(e)-	C
2	freeze	koor-	koor-as(e)-	C
3	dry	kowak-	kowak-as(e)-	C
4	wake up	okir-	ok-os(e)-	C
5	go out/put out	kije-	kij-as-	C
6	sink	sizum-	sizum-e-	C
7	learn/teach	manab-	itkas(e)-	S
8	melt	toke-	tok-as(e)-	C
9	stop	tom-ar-	tome-	A
10	turn	mawar-	mawas(e)-	E
11	dissolve	toke-	tok-as(e)-	C
12	burn	jak-e-	jak-	A
13	destroy	utgar-e-	utgar-	A
		utgare-	utgar-as(e)-	C
		utkuzue-	utkuzus(e)-	E
14	fill	mitir-	mit-as(e)-	C
15	finish	owar-	owar-as(e)-	C
		sum-	sum-ase-	C
16	begin	hatm-ar-	hatme-	A
17	spread	hiog-ar-	hioge-	A
18	roll	koogar-	koogas(e)-	E
19	develop	sakae-	sakae-sas(e)-	C
20	get lost/lose	ne got nar-	ne got nar-akas(e)-	C
21	rise/raise	ag-ar-	age-	A
22	improve	ju nar-	ju nar-akas(e)-	C
		ju nar-	ju s-	S
		zjozi nar-	zjozi nar-akas(e)-	C
23	rock	jue-	ju-akas-	C
24	connect	tunag-ar-	tunage-	A
25	change	kaw-ar-	kawe-	A
26	gather	atm-ar-	atme-	A
27	open	ak-	ak-e-	C
28	break	hittjabur-e-	hittjabur-	A
		war-e-	war-	A
		tunbor-e-	tunbor-	A
29	close	sim-ar-	sime-	A
30	split	wak-ae-	wake-	A
31	die/kill	kesim-	utkoos(e)-	S
		sin-	koos(e)-	S

表 4 を見ると、使役型が 15 対 (18 例¹⁴) で 48.4%、逆使役型が 11.3 対 (14 例) で 36.5%、両者を合わせると 26.3 対 (32 例) であり、全体の約 84.8%を占めていることが分かる。両極型は 2.3 対 (3 例)、補充型は 2.3 対 (4 例) であり、それぞれ全体の約 7.4%にあたる。

佐々木・當山 (2015) は北海道方言と沖縄語首里方言を共通語と対照させ、北にある方言ほど逆使役型¹⁵が優勢であり、南にある方言ほど使役型が優勢であることを指摘している。本稿の記述によって、この傾向が隼人方言にも当てはまることが明らかになった。佐々木・當山 (2015: 70) が報告した上記の 3 方言における使役型の動詞対と逆使役型の動詞対の出現数に、横山 (2017: 284) の奄美語沖永良部島国頭方言と本稿の隼人方言の調査結果を加えたものを表 5 に示す¹⁶。方言間の比較を容易にするために、Haspelmath (1993: 101) に倣い各方言における A/C 比も算出した。A/C 比は逆使役型 (A) の出現数を使役型 (C) の出現数で割ったものである。この数値が高い方言ほど逆使役型が優勢であり、低い方言ほど使役型が優勢である。

表 5 日琉 5 方言における使役型と逆使役型の出現数と割合

	使役型 (C)	逆使役型 (A)	A/C 比
北海道方言	9.33	18.33	1.96
共通語	11.00	14.50	1.32
隼人方言	15.00	11.33	0.76
国頭方言	14.00	6.00	0.43
首里方言	18.00	6.00	0.33

横山 (2017: 285) が述べているように、研究ごとに派生方向の認定方法が異なる箇所があり、数値の比較は慎重にしなければならないが、本稿の結果も上記の観察の範囲では佐々木・當山 (2015) が示した傾向に当てはまり、これを支持するものである。以下では、隼人方言における使役型 (3.1 節)、逆使役型 (3.2 節)、両極型 (3.3 節) の認定方法を議論する。

3.1. 使役型

使役型の動詞対では、自動詞語根に接辞を付加して他動詞を派生させることによって自他交替ペアを作る。2.2.1 節で示した (18) を再掲する。

- (18) a. 1 boil /wak-/ → /wak-as(e)-/
 b. 23 rock /jue-/ → /ju-akas-/
 c. 6 sink /sizum-/ → /sizum-e-/
 d. 4 wake up /okir-/ → /ok-os(e)-/

¹⁴ 参考のため回答の延べ数を括弧内に示す。この数字は割合の計算などには用いない。以下でも同様。

¹⁵ 佐々木・當山 (2015) における「他動詞有標型」「自動詞有標型」と横山 (2017) における「他動詞化」「非他動詞化」は本稿の「使役型」「逆使役型」にそれぞれ対応する。

¹⁶ 佐々木・當山 (2015) に準じて少数第 2 位まで表示する。

このうち、(18b, d) のような例が使役型であるとする分析には異論が出るのが予想される。(22) のように同一語根からの両極派生という分析が考えられるからである。

- (22) b. 23 rock /ju-e-/ /ju-akas-/
d. 4 wake up /ok-ir-/ /ok-os(e)-/

実際に Haspelmath (2013) は、類似の構造を持つ共通語の動詞対について両極派生であるとする分析している。これに対し Matsumoto (2016: 56-57) はこの分析に (23) - (24) の問題があることを (25) の例などを用いて指摘している。

- (23) [T]reating both noncausative and causative verbs as containing causativity-changing suffixes encounters a problem in the case of verb pairs where the noncausative member has the stem-final vowel /i/, which allegedly contrasts with *-as* and *-os* in (6b, c)¹⁷. Unlike /e/, the vowel /i/ does not have any use as a decausativizing affix, making the bidirectional derivation account implausible.

使役性を変更する接尾辞が非使役動詞と使役動詞の両方に含まれているとする分析は、(6b, c)¹⁷ のように *-as* や *-os* と対立するとされる非使役動詞の語幹末が /i/ である場合に問題となる。/i/ には /e/ のように逆使役接辞としての用法はないため、これを両極派生とする分析は妥当性が低い。(拙訳)

- (24) [T]he status of hypothetical causativity-neutral roots is unclear. There is no evidence for recognizing causativity-neutral roots like *ag* for *ag-ar(-u)* and *age(-ru)*. There are cases where the segments without /e/ and /i/ are roots, but, interestingly, in such cases they are not neutral in causativity but are rather either clearly noncausative or clearly causative.

仮定されている「使役性を持たない語根」の位置づけが不明瞭である。*ag-ar(-u)* と *age(-ru)* に使役性を持たない語根 *ag* を認める根拠はない。/e/ や /i/ を除いた部分が語根である例自体はあるが、興味深いことに、このような場合の語根は使役性を持たないのではなく、むしろ明確に非使役的もしくは使役的である¹⁸。(拙訳)

- (25) a. *de(-ru)* *d-as(-u)*
b. *obiye(-ru)* *obiy-akas(-u)*
c. *miti(-ru)* *mit-as(-u)*

¹⁷ (6c, d) の誤りか。Matsumoto (2016) の (6) は本稿の (25) に対応する。

¹⁸ 「*more(-ru)*」と「*mor-as(-u)*」のペアについて /e/ のない「*mor(-u)*」という動詞が非使役的であることと、「*kire(-ru)*」と「*kir-as(-u)*」のペアについて /e/ のない「*kir(-u)*」という動詞が使役的であることを例に挙げている。

- d. oki (-ru) ok-os (-u)
e. ag-ar (-u) age (-ru)

(Matsumoto 2016: 56 の (6) を一部省略して掲載)

問題の動詞対が両極型であるとする Haspelmath (2013) に対して、ナロック (2007) や Matsumoto (2016) などは使役型であるという立場をとる。ただし、この両者の分析も同一のものではなく、ナロック (2007) が通時的な考察に基づいて分析しているのに対し、Matsumoto (2016) は共時的な考察に基づいて分析している¹⁹。Matsumoto (2016) は派生接尾辞、すなわち (25a-d) では使役接尾辞 /-as-, -akas-, -os-/ が母音語根に接続する際に、語根末の /e, i/ が脱落すると説明している²⁰。Matsumoto (2016) の分析に合わせて (25a-d) の語幹を基底表示し、派生方向を明示すると (26) のようになる²¹。

- (26) a. //de// → //de-as//
 b. //obiye// → //obiye-akas//
 c. //miti// → //miti-as//
 d. //oki// → //oki-os//

本稿でも Matsumoto (2016) と同様に、(18b, d) のような例が共時的に使役型として分析できると考える。ただし、Matsumoto (2016) の説明を当てはめるだけでは不十分な点が残る。隼人方言において問題の構造を持つ動詞対を (27) に示す。

- (27) a. 4 wake up /okir-/ → /ok-os(e)-/ (=18d)
 b. 5 put out /kije-/ → /kij-as-/
 c. 8 melt /toke-/ → /tok-as-/ ²²
 d. 13 destroy /utgare-/ → /utgar-as(e)-/
 e. 14 fill /mitir-/ → /mit-as(e)-/
 f. 23 rock /jue-/ → /ju-akas-/ (=18b)

Matsumoto (2016) と同様の分析を行う場合、(27) の基底形は (28) のようになる。

¹⁹ この他にも佐々木・當山 (2015) は、共通語における「atum-ar-u / atum-e-ru」のような例が「mawa-r-u / mawa-s-u」のような例と同じ両極型であるとする Haspelmath (2013) の分析に対し、「語幹の文節音の数」が多い場合に「形態的有標性」を認めるという基準を設けることで、「語幹の文節音の数」が同じである後者のみを両極型としている（ここで「語幹」は「非過去接尾辞 -(r)u に先行する部分」とされている）。

²⁰ [W]hen -as and other affixes suffixed, the preceding vowel /e/ or /i/ drops out regardless of its nature. (Matsumoto 2016: 57)

²¹ Matsumoto (2016) は母音が脱落する動機については述べていない。すぐに思いつくものとしては、「共通語の語中において /ea, ia/ の連続は観察されず、それを回避するため」というものがあるが、検証はできていない。

²² 「11 dissolve」と同じ結果であった。ここでは両者を「8 melt」で代表させる。

- (28)
- | | | | | |
|----|------------|-------------|---|---------------------------------|
| a. | 4 wake up | //okir-// | → | //okir-os(e)-// |
| b. | 5 put out | //kije-// | → | //kije- ^s as-// |
| c. | 8 melt | //toke-// | → | //toke- ^s as-// |
| d. | 13 destroy | //utgare-// | → | //utgare- ^s as(e)-// |
| e. | 14 fill | //mitir-// | → | //mitir- ^s as(e)-// |
| f. | 23 rock | //jue-// | → | //jue- ^a kas-// |

(28) において矢印の右側にある、使役接尾辞がついた派生先の他動詞は、2.1 節で示した (8) の「連結音実現規則」によってそれぞれ (29) のような表層形が予測されるが、いずれも正確ではない。

- (29)
- | | | | |
|----|---------------------------------|---|-------------------------------|
| a. | //okir-os(e)-// | | * /okir-os(e)-/ ²³ |
| b. | //kije- ^s as-// | → | * /kije-sas-/ |
| c. | //toke- ^s as-// | → | * /toke-sas-/ |
| d. | //utgare- ^s as(e)-// | → | * /utgare-sas(e)-/ |
| e. | //mitir- ^s as(e)-// | → | * /mitir-as(e)-/ |
| f. | //jue- ^a kas-// | → | * /jue-kas-/ |

連結音実現規則

そこで、Matsumoto (2016) に従って語根末の母音を (連結音実現規則の適用前に) 脱落させると、(30) のような表層形が予測される。

- (30)
- | | | | | | |
|----|---------------------------------|---|------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|
| a. | //okir-os(e)-// | | | * /okir-os(e)-/ ²⁴ | |
| b. | //kije- ^s as-// | → | /kij- ^s as-/ | → | /kij-as-/ |
| c. | //toke- ^s as-// | → | /tok- ^s as-/ | → | /tok-as-/ |
| d. | //utgare- ^s as(e)-// | → | /utgar- ^s as(e)-/ | → | /utgar-as(e)-/ |
| e. | //mitir- ^s as(e)-// | | | → | * /mitir-as(e)-/ ²⁴ |
| f. | //jue- ^a kas-// | → | /ju- ^a kas-/ | → | * /ju-kas-/ |

母音脱落規則

連結音実現規則

しかし、(30a, e, f) では依然として正確な表層形は予測できていない。ここで、(28) に示した自動詞に注目して共通語との対応を確認すると、(28a, e) は隼人方言においては //okir-, mitir-// のように r 語幹であるが、共通語においてこれに対応する形式は //oki-, miti-// のように母音語幹であり、この点で異なる。他方、(28f) の //jue-// に対応する共通語形は //jure-// であり、こ

²³ 接尾辞 /-os(e)-/ に連結音を設定する根拠が見つからないため、この例には連結音実現規則の適用箇所が存在しない。

²⁴ 語根末が /e, i/ ではないため、母音脱落規則はこれらの例には適用されない。

ここでは /r/ の有無で異なる。

3.1.1. r 語幹の分析

(30a) について隼人方言の体系内部を観察すると、動詞由来複合語「早起き」が [hajaoʔ] と実現し、この複合語の基底形は //haja+ok// もしくは //haja+oki// であることが推定される²⁵。すなわち、動詞語根は //okir-// ではなく //ok-// もしくは //oki-// であると考えられる。動詞語根が //ok-// であれば接尾辞として //-ir-// を、動詞語根が //oki-// であれば接尾辞として //-r-// をそれぞれ取り出すことになる。ここで、//ok-, oki-// は上記の動詞由来複合語の観察から自動詞語根であるとみなすことができる。そのため、自動詞語根と共起して自動詞語幹を形成している接尾辞 //-ir-, -r-// は、使役性に影響を与える機能を持たず、単に動詞語幹を形成するためのもの(動詞語幹化接尾辞)と考えることができる²⁶。上記の複合語を観察する限りにおいては、両者のうちのどちらかを語根とみなしても分析上の問題は生じないが、後述する現象の観察を踏まえると、//oki-// を語根として認める分析が適切であることが分かる。

(31) で両語根を比較する。語根として仮に取り出した部分にそれぞれ使役接尾辞を付けている。ここでは(31b)に Matsumoto (2016) の母音脱落規則が適用され、両者とも正しい表層形を予測する。

- (31)
- | | | |
|-------------------|---|-------------|
| a. //ok-os(e)-// | | /ok-os(e)-/ |
| b. //oki-os(e)-// | → | /ok-os(e)-/ |
- 母音脱落規則

上記の観察結果を反映すると、自動詞語幹は暫定的に(32)のように表記できる。

- (32)
- | |
|---------------|
| a. //ok-ir-// |
| b. //oki-r-// |

通時的には、この例はいわゆる「ラ行五段化」を経たものである。隼人方言においては、共通語のいわゆる「下一段動詞」の一部(語根の音節数が1のもの)と「上一段動詞」に対応する動詞が、r 語幹として実現する。「起きる」や「満ちる」の他にも「見る」や「寝る」が r 語幹であることが調査の際に確認できている。このうち「寝る」を(32)と同じように分析すると(33)のようになる。

- (33)
- | |
|--------------|
| a. //n-er-// |
| b. //ne-r-// |

²⁵ 「起きる」の語根が //okir-// であれば *[hajaokiʔ] が予測される。

²⁶ 松本曜氏のご指摘を参考にした。

(32a) と (33a) の分析では、接尾辞の異形態として //ir-, -er// の 2 種類を認める必要がある。一方で (32b) と (33b) の分析では //r// の 1 種類のみである。これを踏まえ本稿では //oki// を語根として認める後者の分析案を採用する。(30) における「4 wake up」と「14 fill」の問題は (34) の通り解決する。

- (34) a. //oki-os(e)// → /ok-os(e)/ → /ok-os(e)/
 起きる-CAUS-
 b. //miti-^sas(e)// → /mit-^sas(e)/ → /mit-as(e)/
 満ちる-CAUS-
 母音脱落規則 連結音実現規則

これに対応する自動詞語幹の内部構造は (35) のように表示できる。

- (35) a. //oki-r//
 起きる-VLZ-
 b. //miti-r//
 満ちる-VLZ-

3.1.2. /r/ の脱落

残る (30f) は、語根の基底形を //jure// とすることで (36) の通り問題が解決する。

- (36) //jure-^akas// → /jur-^akas/ → /jur-akas/ → /ju-akas/
 揺れる-CAUS-
 母音脱落規則 連結音実現規則 /r/ 脱落規則 (38)

表層形には存在しない /r/ を基底形に設定する根拠は (37) の通りである。

- (37) a. (30f) で誤った予測がなされたのは、連結音実現規則の適用時に入力 ^a/ju-^akas/ であったこと、すなわち連結音の直前の音素が母音であるために連結母音 ^a/r/ が実現しなかったことにある。
 b. 連結母音 ^a/r/ が実現するためには、連結音実現規則の適用時に連結母音の直前の音素が子音である必要がある。
 c. 隼人方言では母音間の /r/ が (38) のように脱落することがある²⁷。

²⁷ 調査時には /r/ を脱落させない発音との揺れが見られるものも多かったが、調査者が発音し分けたものを話者に聞いてもらった際には /r/ がある発音は鹿児島市方言のように聞こえ、/r/ がない発音は隼人方言のように聞こえるという発言があった。本稿の記述においても「脱落していない /r/」が表層形に見られることがあるが、

d. 他の子音では類似の現象は確認できておらず、何らかの子音が脱落しているとすれば /t/ である可能性が高い。

(38) /t/ 脱落規則

r → Ø / V _ V /koo-r-an/ → /koo-an/ [ko:an] (凍る-NEG) ²⁸

これに対応する自動詞語幹は (39) の通りである。

(39) //jure-// → /jue-/

/t/ 脱落規則

付言すると、ここで導き出された基底形は通時的な事実とも矛盾しない。

3.2. 逆使役型

逆使役型の動詞対では、他動詞語根に接辞を付加して自動詞を派生させることによって自己交替ペアを作る。2.2.1 節で示した (19) を再掲する。

- (19) a. 9 stop /tom-ar/ ← /tome-/
 b. 12 burn /jak-e/ ← /jak-/
 c. 30 split /wak-ae/ ← /wake-/

このうち、(19a, c) のような例が逆使役型であるとする分析に対して、3.1 節の使役型でも見たように (40) のような同一語根からの両極派生という分析案も考えられる。

- (40) a. 9 stop /tom-ar/ /tom-e-/
 c. 30 split /wak-ae/ /wak-e-/

Matsumoto (2016) は逆使役型の例として (25e) を挙げている。(25e) を再掲する。

- (25) e. ag-ar (-u) age (-ru)

Matsumoto (2016) の説明では派生接尾辞、すなわち (25e) では逆使役接尾辞 //ar-// が母音語根に接続する際に、語根末の /e/ が脱落する。Matsumoto (2016) の分析に合わせて (25e) の

これが音声的な違いであるか音韻的な違いであるかについては未解明である。

²⁸ 「凍る」の語幹末に子音があることは、非過去形 /koo-r-u/ → /koot/ [ko:ʔ] や過去形 /koo-r-ta/ → /kootta/ [ko:tta] などの観察から分かる。この語幹末の子音が /t/ であることは、非過去形で /koot/ [ko:ʔ] に加えて /kooj/ [ko:j] という発音がなされることがあることから判断できる (参照: (9) の音節末子音化規則)。

語幹を基底表示し、派生方向を明示すると (41) のようになる。

(41) //age-ar-// ← //age-//

隼人方言において問題の構造を持つ動詞対を (42) に示す。先に見た使役型の場合と同じく、本稿では (19a, c) のような例が共時的に逆使役型として分析できると考える。

(42) a. 9 stop /tom-ar-/ ← /tome-/ (=19a)
 b. 16 begin /hatm-ar-/ ← /hatme-/
 c. 17 spread /hiog-ar-/ ← /hioge-/
 d. 21 raise /ag-ar-/ ← /age-/
 e. 24 connect /tunag-ar-/ ← /tunage-/
 f. 25 change /kaw-ar-/ ← /kawe-/
 g. 26 gather /atm-ar-/ ← /atme-/
 h. 29 close /sim-ar-/ ← /sime-/
 i. 30 split /wak-ac-/ ← /wake-/ (=19c)

Matsumoto (2016) と同様の分析を行う場合、(42) の基底形は (43) のようになる。

(43) a. 9 stop //tome-ar-// ← //tome-//
 b. 16 begin //hatme-ar-// ← //hatme-//
 c. 17 spread //hioge-ar-// ← //hioge-//
 d. 21 raise //age-ar-// ← //age-//
 e. 24 connect //tunage-ar-// ← //tunage-//
 f. 25 change //kawe-ar-// ← //kawe-//
 g. 26 gather //atme-ar-// ← //atme-//
 h. 29 close //sime-ar-// ← //sime-//
 i. 30 split //wake-ac-// ← //wake-//

(43) において矢印の左側にある、逆使役接尾辞がついた派生先の自動詞は、(29) で見た他動詞の例とは異なり連結音がないために連結音実現規則は適用されない。Matsumoto (2016) の母音脱落規則によって (44) のように表層形が正しく予測される。

(44) a. //tome-ar-// → /tom-ar-/
 b. //hatme-ar-// → /hatm-ar-/
 c. //hioge-ar-// → /hiog-ar-//

d. //age-ar-//	→	/ag-ar-/
e. //tunage-ar-//	→	/tunag-ar-/
f. //kawe-ar-//	→	/kaw-ar-/
g. //atme-ar-//	→	/atm-ar-/
h. //sime-ar-//	→	/sim-ar-/
i. //wake-ae-//	→	/wak-ae-/

母音脱落規則

3.3. 両極型

両極型の動詞対では、語根末の 1~2 つの音素の交替によって自他交替ペアを作る。2.2.2 節で示した (20) を再掲する。前述の通り、(20a, c) は /r/ と /s(e)-/、(20b) は /e/ と /s(e)-/ の交替である。

(20)	a.	10 turn	/mawar-/	/mawas(e)-/
	b.	13 destroy	/utkuzue-/	/utkuzus(e)-/
	c.	18 roll	/koogar-/	/koogas(e)-/

ここでは、(20) で語根末音素と分析したものを接尾辞であるとみなして (45) のように分析することや、2.2.1 節で示した接尾辞と同じ音素の並びが含まれていることに注目して (46) のように分析する案も一見すると妥当であるように感じられる。

(45)	a.	10 turn	/mawa-r-/	/mawa-s(e)-/
	b.	13 destroy	/utkuzu-e-/	/utkuzu-s(e)-/
	c.	18 roll	/kooga-r-/	/kooga-s(e)-/
(46)	a.	10 turn	/maw-ar-/	/maw-as(e)-/
	c.	18 roll	/koog-ar-/	/koog-as(e)-/

(45) の分析は、語根として /mawa-, utkuzu-, kooga-/ を立てて、逆使役接尾辞の /-r-, -e-/ と使役接尾辞の /-s(e)-/ を認めるものである。ここで、語根として取り出された部分に過去接尾辞 /-ta/ の接続を試みると、*/mawa-ta, utkuzu-ta, kooga-ta/ という形式が予測される。しかし、このような形式は存在せず、他の動詞語根とふるまいが異なることから妥当性が低い。語根は形態素であり、形態素であればその定義上何かしらの意味を持つ。しかし (45) の分析で語根として取り出された形式は意味を持つ単位ではなく、形態素であると認められないことから、語根としても認められない。加えて、この分析に従うと 2 つの接尾辞 /-r-, -s(e)-/ を新たに認めることになるが、形態素 (ないし異形態) を増やすことになり経済性の観点からも推奨されな

い。

(46) の分析は、語根として /maw-, koog-/ を立てて、逆使役接尾辞の /-ar-/ と使役接尾辞の /-as(e)-/ を認めるものである。ここでも、過去接尾辞 /-ta/ などの接続を試みると存在しない形式が予測される²⁹。さらに、そもそも (46b) に該当する分析が存在せず、統一的な分析ができないことから不適当である。以上により、ここでは (20) の分析が支持される。

4. 語幹に関する問題

本節では、語幹に関する 2 つの問題について議論する。4.1 節では母音語幹の語幹末について、4.2 節では s 語幹とも母音語幹とも分析できそうな語幹の認定方法と表記方法について扱う。

4.1. 母音語幹の語幹末

2.1 節で述べた通り、母音語幹の語幹末は非過去接尾辞が付加された (12) のように /u/ として実現する場合と、過去接尾辞が付加された (13) のように /e/ として実現する場合がある。

(12) //ak-e-^ɾu// → /ak-e-ru/ → /ak-e-t/ → /ak-u-t/ [aku?]
 開く-CAUS-NPST
 連結音実現規則 音節末子音化規則 語幹末母音交替規則

(13) //ak-e-ta// /ak-e-ta/ [aketa]
 開く-CAUS-PST

以下では短母音化規則 (47) と語幹末母音交替規則 (49) を導入し、母音語幹の語幹末が基底において //e// であることを主張する。このうち短母音化規則は (47) のように、同一母音の連続 $V_i V_i$ を短母音 V_i にする規則である。

(47) 短母音化規則
 $V_i V_i \rightarrow V_i$

母音語幹の語幹末が /u/ として実現するのは、(48) に示す 4 種類の屈折接尾辞が後続する場合

²⁹ /mawar-/ と /mawas(e)-/ のペアについては、3.1.1 節で見た「早起き」と同様に「めまい」という語を基に語根として /maw-/ を認めれば、これに動詞語幹化接尾辞 /-ar-/ が付加されたものが自動詞語幹、使役接尾辞 /-as(e)-/ が付加されたものが他動詞語幹と考えて、使役型に分類することも可能である（この分析における形態素境界は (46) のものと一致する）。この分析をとると、3.1.1 節で認めた動詞語幹化接尾辞の基底形は //r-// と表示することになる。しかし、この分析における「回る」の語根と「めまい」の「まい」の対応が共時的に存在し、話者の頭の中で /maw-/ から /maw-ar-/ が導かれていると考えられる根拠が見つかっていないため、本稿では採用しない。

合に限られる。

- (48) a. 非過去 //^ru//
b. 禁止 //^hna//
c. 条件 //eba//
d. 意志 //^au//

このうち (48d) の意志接尾辞は、母音に続くときには連結音が実現しないため /-u/ として出力される。子音に続くときには連結音が実現するため /-au/ となり、これに母音融合規則が適用されて /-o/ として出力される。

語幹末母音のみが異なる 2 種類の異形態が存在する母音語幹について、(49) に挙げる 3 つの分析案が考えられる。コロンの右側には、それぞれの分析で想定される「語幹末母音交替規則」の詳細を示す。

- (49) a. 接尾辞に応じて //e// と //u// の 2 種類をそれぞれ基底に立てる：交替なし
b. 基底に //u// のみを立てる：(48) の接尾辞が付加されないときに /e/ と交替
c. 基底に //e// のみを立てる：(48) の接尾辞が付加される時のみ /u/ と交替

以下では、動詞語幹が「開く-CAUS-」である場合を例にして、(49c) の分析が適切であることを主張する。

4.1.1. 接尾辞に応じて //e// と //u// の 2 種類をそれぞれ基底に立てる分析

(49a) のとき、(48d) の意志接尾辞 //^au// を母音語幹に付加すると語幹末母音は /u/ として実現するため、これを「開く-CAUS-」に付加した「開く-CAUS-VOL」の基底形は //ak-u^au// である。一方 (48) に含まれない命令接尾辞 //^ai// を母音語幹に付加すると、語幹末母音は /e/ として実現するため、これを「開く-CAUS-」に付加した「開く-CAUS-IMP」の基底形は //ak-e^ai// である。

このうち後者の「開く-CAUS-IMP」では、接尾辞が母音に接続しているために連結音実現規則が適用される際に連結母音が実現せずに /ak-e-i/ となり、これに母音融合規則が適用されて正しい出力である /ak-e/ が得られる。すなわち、この条件下では連結音実現規則が母音融合規則に先んじて適用される。

これに対して前者の「開く-CAUS-VOL」では表 6 に示すように、正しい出力である /ak-u/ は得られない。表中では行ごとに規則 1、規則 2、規則 3 の順で適用されると考える。「なし」は当該規則の適用箇所が存在しないことを表す。なお、d-f で出力を */at-au/ ではなく */at-o/ としているのは、先に見た命令接尾辞の例により、この条件下では連結音実現規則の適用後に母音融合規則が適用されることが分かっているためである。すなわち、d-f では連結音実現規則

により */at-au/ が派生された後に母音融合規則が適用されて */at-o/ となることが予測される。

表 6 (49a) における規則の適用順序 (意志接尾辞)

	基底形	規則 1	規則 2	規則 3	出力 (表層形)
a.	//ak-u- ^a u//	連結音実現 ak-u-u	短母音化 ak-u	音節末子音化 at	*/at/
b.			音節末子音化 at-u	短母音化 なし	
c.		短母音化 なし	連結音実現 ak-u-u	音節末子音化 at-u	*/at-u/
d.			音節末子音化 at- ^a u	連結音実現 at-au	
e.		音節末子音化 at- ^a u	連結音実現 at-au	短母音化 なし	*/at-o/
f.			短母音化 なし	連結音実現 at-au	

表 6 では、連結音実現規則、短母音化規則、音節末子音化規則の 3 種類をどのように組み合わせても正しい出力である /ak-u/ は得られず、*/at/、*/at-u/、*/at-o/ という誤った出力が得られる。したがって (49a) の分析は適切ではない。

4.1.2. 基底に //u// のみを立てる分析

(49b) のとき、語幹末母音の基底に //u// を立てることから、命令接尾辞が付加された「開く-CAUS-IMP」の基底形は //ak-u-^ai// である。ここでは語幹末母音交替、連結音実現、音節末子音化の 3 規則の適用順序を考える。表 7 によりこの条件下では語幹末母音交替規則が音節末子音化規則に先んじて適用される a-c の場合のみ正しい出力が得られることが分かる。なお、表 7 は母音融合規則が連結音実現規則より後に適用されることを前提として作成している。両者の適用順序が異なる場合には、上述の 3 規則の適用順序の如何に依らず正しい出力は得られない。

表 7 (49b) における規則の適用順序 (命令接尾辞)

	基底形	規則 1	規則 2	規則 3	出力 (表層形)
a.	//ak-u- ^a i//	語幹末母音交替 ak-e- ^a i	音節末子音化 なし	連結音実現 ak-e-i	/ak-e/
b.			連結音実現 ak-e-i	音節末子音化 なし	
c.		連結音実現 ak-u-i	語幹末母音交替 ak-e-i	音節末子音化 なし	
d.			音節末子音化 at-i	語幹末母音交替 なし	*/at-i/
e.		音節末子音化 at- ^a i	連結音実現 at-ai	語幹末母音交替 なし	*/at-e/
f.			語幹末母音交替 なし	連結音実現 at-ai	

ここで、(49b) の分析では語幹末母音の基底に //u// を立てることから、意志接尾辞が付加された「開く-CAUS-VOL」の基底形は //ak-u-^au// である。意志接尾辞は表層形で /u/ に続く接尾辞であるため、/e/ との交替は生じない。表 7 で正しい出力が得られた a-c の適用順序を検討すると、表 8 のようにいずれも誤った表層形が予測される。したがって (49b) の分析も適切ではない。

表 8 (49b) における規則の適用順序 (意志接尾辞)

	基底形	規則 1	規則 2	規則 3	出力 (表層形)
a.	//ak-u- ^a u//	語幹末母音交替 なし	音節末子音化 at- ^a u	連結音実現 at-au	*/at-o/
b.			連結音実現 ak-u-u	音節末子音化 at-u	*/at-u/
c.		連結音実現 ak-u-u	語幹末母音交替 なし	音節末子音化 at-u	

4.1.3. 基底に //e// のみを立てる分析

(49c) のとき、語幹末母音の基底に //e// を立てることから、意志接尾辞が付加された「開く-CAUS-VOL」の基底形は //ak-e-^au// である。ここでも語幹末母音交替、連結音実現、音節末子音化の 3 規則の適用順序を考える。表 9 によりこの条件下では音節末子音化規則が語幹末母音交替規則に先じて適用される場合にのみ正しい出力が得られることが分かる。なお、表 9 は母音融合規則と短母音化規則が表中の 3 規則より後に適用されることを前提として作成してい

る。この適用順序が異なる場合には、上述の3規則の適用順序の如何に依らず正しい出力は得られない。

表 9 (49c) における規則の適用順序 (意志接尾辞)

	基底形	規則 1	規則 2	規則 3	出力 (表層形)
a.	//ak-e- ^a u//	音節末子音化 なし	連結音実現 ak-e-u	語幹末母音交替 ak-u-u	/ak-u/
b.			語幹末母音交替 ak-u- ^a u	連結音実現 ak-u-u	
c.		連結音実現 ak-e-u	音節末子音化 なし	語幹末母音交替 ak-u-u	
d.			語幹末母音交替 ak-u-u	音節末子音化 at-u	
e.		語幹末母音交替 ak-u- ^a u	連結音実現 ak-u-u	音節末子音化 at-u	*/at-o/
f.			音節末子音化 at- ^a u	連結音実現 at-au	

ここで、(49c) の分析では語幹末母音の基底に //e// を立てることから、命令接尾辞が付加された「開く-CAUS-IMP」の基底形は //ak-e-^ai// である。命令接尾辞は表層形で /e/ に続く接尾辞であるため、/u/ との交替は生じない。さらに、音節末子音化規則の適用箇所も存在しないことから、表 9 で示した 3 規則の適用順序はここでは問題にならず、a-c のいずれの場合においても正しい予測をする (表 10)。すなわち、連結音実現規則により /ak-e-i/ となり、母音融合規則により /ak-e/ が得られる。

表 10 (49c) における規則の適用順序 (命令接尾辞)

	基底形	規則 1	規則 2	規則 3	出力 (表層形)
a.	//ak-e- ^a i//	音節末子音化 なし	連結音実現 ak-e-i	語幹末母音交替 なし	/ak-e/
b.			語幹末母音交替 なし	連結音実現 ak-e-i	
c.		連結音実現 ak-e-i	音節末子音化 なし	語幹末母音交替 なし	

続いて、(48) に挙げた残りの接尾辞を検討する。非過去接尾辞の //ɸu// について表 11 を見ると表 9 と表 10 で正しい予測をした a-c の適用順序のうち c のみが適切であることが分かる。

表 11 (49c) における規則の適用順序 (非過去接尾辞)

	基底形	規則 1	規則 2	規則 3	出力 (表層形)
a.	//ak-e- ^r u//	音節末子音化	連結音実現 ak-e-ru	語幹末母音交替 ak-u-ru	*/ak-u-ru/
b.		なし	語幹末母音交替 ak-u- ^r u	連結音実現 ak-u-ru	
c.		連結音実現 ak-e-ru	音節末子音化 ak-e-t	語幹末母音交替 ak-u-t	/ak-u-t/

同じく (48) に含まれる禁止接尾辞の //na// と条件接尾辞の //eba// でも同様の適用順序で正しい出力が得られる。禁止接尾辞の //na// では、表 12 のように基底形の //ak-e-na// が連結音実現規則で /ak-e-tna/ となり、語幹末母音交替規則で /ak-u-tna/ が出力される。

表 12 (49c) における規則の適用順序 (禁止接尾辞)

基底形	連結音実現	音節末子音化	語幹末母音交替	出力 (表層形)
//ak-e-na//	ak-e-tna	なし	ak-u-tna	/ak-u-tna/

条件接尾辞の //eba// では、表 13 のように基底形の //ak-e-eba// から語幹末母音交替規則によって /ak-u-eba/ が出力される。なお、表 9 で見たように短母音化規則は表中の 3 規則より後に適用されるため、語幹末母音交替規則の適用前に存在する /e/ の連続には適用されない。

表 13 (49c) における規則の適用順序 (条件接尾辞)

基底形	連結音実現	音節末子音化	語幹末母音交替	出力 (表層形)
//ak-e-eba//	なし	なし	ak-u-eba	/ak-u-eba/

上記の観察を踏まえ、語幹末母音の基底に //e// のみを立て、(48) に挙げた 4 種類の接尾辞が付加されるときにのみ /u/ と交替すると考える (49c) の分析案を採用する。これは //kure-// 「くれる」のように、//e// の前に形態素境界がない場合にも同様である。この環境で (のみ) 語幹末母音の交替が起きる理由については未解明である。

4.2. s 語幹と母音語幹

最後に、本稿で /(e)/ と表記している音素を持つ動詞について記述する。2.1 節で述べた通り、語幹を認定する際には主に各動詞の否定形を参照しているが、否定形のみでは語幹を 1 つに定められないものも散見される。これは、(14) のように 2 種類の否定形が観察されることによる。(14) を再掲する。

(14) a. [tokasan] ~ b. [tokasen] 「溶かさない」

(14a) からは (15a) のように s 語幹と判断することができ、(14b) からは (15b) のように母音語幹と判断することができる。(15) を再掲する。

(15) a. //tok-^sas-^an// → /tok-as-an/ [tokasan]

溶ける-CAUS-NEG

連結音実現規則

b. //tok-^sase-^an// → /tok-ase-n/ [tokasen]

溶ける-CAUS-NEG

連結音実現規則

(14) とその類例 (暫定的に X 語幹動詞と呼称する) の否定形と、各否定形から導かれる語幹を (50) に示す。それぞれ「~」の左側が s 語幹と判断される形式、右側が母音語幹と判断される形式である。

(50) a. 8 melt [tokasan] ~ [tokasen] /tok-as-/ ~ /tok-ase-/²²
 b. 13 destroy [ugg^wasan] ~ [ugg^wasen] /utgas-/ ~ /utgase-/
 c. 18 roll [ko:gasan] ~ [ko:gasen] /koogas-/ ~ /koogase-/

ここで、X 語幹動詞の非過去形、過去形、否定形を音声表記で表 14 に示す。数字の前のアルファベットは (50) に対応している。

表 14 X 語幹動詞の調査結果

	非過去	過去	否定
a. 8 melt	tokasu?	toketa tokaseta	tokasan tokasen
b. 13 destroy	ugg ^w a:? ugg ^w a:su?	ugg ^w a:eta	ugg ^w asan ugg ^w asen
c. 18 roll	ko:ga? ko:gasu?	ko:geta	ko:gasan ko:gasen

X 語幹動詞では否定形だけでなく、非過去形や過去形でも 2 種類の形式が現れる例がある。さらに、それぞれの動詞の形式を他の動詞の調査結果 (稿末の資料 1) と併せて検討すると、上

段に示した形式は表 15 a-b のような s 語幹、下段に示した形式は表 15 c のような母音語幹と対応することが分かる。

表 15 s 語幹と母音語幹の例

	語幹	非過去	過去	否定
a. 5 put out	kij-as-	kijas	kijaeta	kijasan
b. 23 rock	ju-akas-	juaka?	juaketa	juakasan
c. 6 sink	sizum-e-	eizumu?	eizumeta	eizumen

3 節の表 4 に示した 31 対の動詞のうち、否定形のみに基づいて設定した語幹が s 語幹であるもの（語幹の最終音素が /s/ であるもの）、もしくは母音語幹のうち語幹の次末音素が /s/ であるもの（以下、sV 語幹）を (50) の X 語幹動詞と併せて表 16 に示す。色付きのセルが X 語幹動詞である。

表 16 語幹の最終音素もしくは次末音素に /s/ を持つ動詞

	調査語彙	否定形	語幹 (暫定)	語幹の種類 (暫定)
1	boil	wakasan	wak-as-	s
2	freeze	ko:asen	koor-ase-	sV
3	dry	kowakasen	kowak-ase-	sV
4	wake up	okosan	ok-os-	s
5	go out/put out	kijasan	kij-as-	s
7	learn/teach	ikkasen	itkase-	sV
8	melt	tokasan tokasen	tok-as- tok-ase-	X
10	turn	mawasan	mawas-	s
11	dissolve	tokasan tokasen	tok-as- tok-ase-	X
13	destroy	ugg ^w asan ugg ^w asen	utgas- utgase-	X
14	fill	mitasan	mit-as-	s
15	finish	owa:sen	owar-ase-	sV
		sumasen	sum-ase-	sV
18	roll	ko:gasan ko:gasen	koogas- koogase-	X
19	develop	sakaesasen	sakae-sase-	sV
20	get lost/lose	ne go? na:kasan	ne got nar-akas-	s
22	improve	ju na:kasan	ju nar-akas-	s
		ju sen	ju se-	sV
		zozu na:kasan	zjozi nar-akas-	s
23	rock	juakasan	ju-akas-	s
31	die/kill	ukko:san	utkoos-	s
		ko:san	koos-	s

X 語幹動詞だけでなく、表 16 において暫定的に s 語幹や sV 語幹としている動詞についても、非過去形や過去形を観察すると、そのいずれかもしくは両方に 2 種類の形式が現れる例があることが分かる (稿末の資料 1)。一方で、表 16 以外の動詞では同様の現象は観察されない。表 16 の動詞のうち非過去形、過去形、否定形のいずれかに 2 種類の形式が現れた動詞を表 17 に

挙げる。

表 17 同一の環境で 2 種類の形式が現れた動詞

	調査語彙	語幹 (暫定)	語幹の種類 (暫定)
1	boil	wak-as-	s
2	freeze	koor-ase-	sV
3	dry	kowak-ase-	sV
7	learn/teach	itkase-	sV
8	melt	tok-as- tok-ase-	X
11	dissolve	tok-as- tok-ase-	X
13	destroy	utgas- utgase-	X
14	fill	mit-as-	s
15	finish	owar-ase-	sV
		sum-ase-	sV
18	roll	koogas- koogase-	X
19	develop	sakae-sase-	sV
20	get lost/lose	ne got nar-akas-	s
22	improve	ju nar-akas-	s
		zjozi nar-akas-	s
31	die/kill	utkoos-	s
		koos-	s

上述の通り、表 17 の動詞では同一の環境において 2 種類の形式が出現しうる。両者は形態的には「1 boil」/wak-as-, wak-ase-/ のように語幹末の 1 音素のみが異なっている³⁰。この「1 boil」の非過去形 [waka?] と [wakasu?] は、共通語の「沸かす」と「沸かせる」にそれぞれ対応する形式であると考えられる。早津 (2020: 58) は、共通語において「V- (サ)セルという形 (運ばせる、食べさせる) に対して V- (サ)スという形 (運ばす、食べさす) が用いられることがあ

³⁰ 「語幹末」は大きく 2 つに分けられる。2.1 節で述べた通り、「語幹」は「語根+0 個以上の派生接尾辞」であるから、派生接尾辞が 0 個である場合の語幹末は語根であり、派生接尾辞が 1 個以上である場合の語幹末は接尾辞である。なお、この環境に出現して母音語幹を形成する接尾辞は (少なくとも本稿の範囲では) /^hase-/ と /^hkase-/ のみであるから、いずれの場合にも次末音素の /s/ と最終音素の /e/ は同一形態素内に存在する。

る」としたうえで、「種々の研究においても両者の違いは必ずしも明瞭になっていない」と述べている。隼人方言においては、共通語以上に研究は進んでおらず、語幹末の /e/ の有無で異なるそれぞれの接辞や語根が持つ機能や意味的特徴の詳細な記述については、本稿の範囲を超えるものである。本稿ならびに高城（2020）では、1つの調査語彙への回答に s 語幹の形も sV 語幹の形も確認されたことを簡潔に示す目的で、表 17 に挙げた動詞の語幹末を /e/ と表記している。

なお、非過去形では sV 語幹の形式が出現し、過去形と否定形では s 語幹の形式が出現するという分布をしている表 18 のような例もある。

表 18 語幹の形式が相補分布しているように見える動詞³¹

	調査語彙	語幹	非過去	過去	否定
4	wake up	ok-os(e)-	okosu?	oketa	okosan
10	turn	mawas(e)-	mawasu?	maeta	mawasan
13	destroy	utkuzus(e)-	ukkuzusu?	ukkuzita	/

一見すると表 18 の動詞は sV 語幹の形式と s 語幹の形式が相補分布しており、表 18 のみを見る限りにおいては補充法である可能性も否定できない。ただし、空欄箇所の形式が存在しないという確認は取れておらず、調査を進めれば空欄箇所が埋まる可能性が残っている。したがって、表 18 の動詞についても表 17 の動詞と同じく語幹末を /e/ と表記している。

5. 結論

本稿では、隼人方言の自他交替についての調査結果を報告した。2.1 節で自他交替にかかわる形態音韻規則を明らかにし、2.2 節で自他交替にかかわる形態統語論的手段として、接辞の付加による派生（使役型・逆使役型）、語根末音素の交替（両極型）、語根の交替（補充型）の 3 種類があることを示した。このうち、使役型が 48.4%、逆使役型が 36.5%であり接辞の付加による派生が全体の約 84.8%を占めていることを 3 節で述べた。先行研究で示されていた日琉 4 方言の調査結果と比較することで、北にある方言ほど逆使役型が優勢であり、南にある方言ほど使役型が優勢であるとする佐々木・當山（2015）の傾向が隼人方言にも当てはまることを明らかにした。これにより、自他交替に関する通方言的な研究および通言語的な研究に貢献した。

3 節では、形態素境界と派生方向の分析に際して使役型、逆使役型、両極型のそれぞれで考えられる問題点も扱った。Matsumoto（2016）などによる共通語についての先行研究を参照しつ

³¹ 斜線は未調査であることを表す。

つ、隼人方言における認定基準を議論した。4.1 節では 2 種類の母音 /e, o/ が出現する母音語幹の語幹末が基底において //e// であることを主張した。4.2 節では動詞語幹の認定に際して問題が生じるものについて、これらの語幹の共通点が「最終音素もしくは次末音素に /s/ を持つ」点であることを指摘し表記方法を定めた。本稿の分析は隼人方言のみならず、近隣の鹿児島県本土諸方言を含む日本語方言の記述的研究に寄与する可能性を持つ。

略号一覧

ADV 副詞化 C 任意の子音 CAUS 使役 IMP 命令 NEG 否定 NPST 非過去

PST 過去 V 任意の母音 VLZ 動詞語幹化 VOL 意志

[] 音声表記 // 音素表記 /// 基底形 - 接辞境界 = 接語境界 + 語幹境界

参考文献

Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: Bernard Comrie & Maria Polinsky (eds.) *Causatives and transitivity*, 87–120. Amsterdam: Benjamins.

早津恵美子 (2020) 「使役動詞 (V- (サ) セル) の語彙的・文法的な一単位性」『東京外国語大学国際日本学研究』0: 58–70.

木部暢子 (2001) 「鹿児島方言に見られる音変化について」『音声研究』5(3): 42–48.

清瀬義三郎則府 (1971) 「連結子音と連結母音と : 日本語動詞無活用論」『国語学』86: 56–42.

黒木邦彦 (2015) 「音韻規則」窪菌晴夫 (監修) 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦 (編) 『甌島里方言記述文法書 改訂版』, 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」サブプロジェクト「鹿児島県甌島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」. 30–49. 東京 : 国立国語研究所.

Matsumoto, Yo (2016) Phonological and Semantic Subregularities in Noncausative: Causative Verb Pairs in Japanese. In: Taro Kageyama & Wesley Jacobsen (eds.) *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond*, Trends in Linguistics. Studies and Monographs 297. 51–88. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton.

ナロック、ハイコ (2007) 「日本語自他動詞対の類型論的位置づけ」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム』3: 161–193. 東京 : ひつじ書房.

佐々木冠・當山奈那 (2015) 「日本語族における他動性交替の地域差」パルデシ・プラシヤント・桐生和幸・ナロック・ハイコ (編) 『有対動詞の通言語的研究 : 日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』59–73. 東京 : くろしお出版.

高城隆一 (2019) 「鹿児島県肝付町内之浦方言の音節末摩擦音」『東京大学言語学論集』41(eTULIP): e85–e95.

高城隆一 (2020) 「鹿児島県隼人方言使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp/>)

梅田遼 (2018) 「北サーミ語の自他交替についての諸考察」『東京大学言語学論集』39: 321–341.

横山晶子（2017）「琉球沖永良部島国頭方言の文法」博士論文，一橋大学.

霧島市「住民基本台帳人口」<https://www.city-kirishima.jp/jouhou/shise/toke/shiryo.html> [令和2年4月アクセス].

資料 1 調査結果一覧

- 「語幹」は音素表記、「非過去」「過去」「否定」は音声表記である。
- 色付きのセルは有標な形式であること、斜線は未調査であることを示す。
- 二段表記の上段はs語幹、下段は母音語幹の形式である(4.2節参照)。

#	動詞	Non-causative				Causative				種類
		語幹	非過去	過去	否定	語幹	非過去	過去	否定	
1	boil	wak-	wa?	weta	wakan	wak-as(e)-	waka? wakasu?	waketa	wakan	C
2	freeze	koor-	ko:?	ko tta	ko an	koor-as(e)-	ko:as ko:aseta?	ko:acta ko:aseta	ko:asen	C
3	dry	kowak-	kowa?	koeta	kowakan	kowak-as(e)-	kowakasu?	kowakaeta kowakaseta	kowakasen	C
4	wake up	okir-	oki?	okitta	okian	ok-os(e)-	okosu?	oketa	okosan	C
5	go out/put out	kije-	kiu?	kieta	kien	kij-as-	kijas	kijaeta	kijasan	C
6	sink	sizum-	eizun	eizunda	eizuman	sizum-e-	eizumu?	eizumeta	eizumen	C
7	learn/teach	manab-	manan	mananda	manaban	itkas(e)-	ikkasu?	ikkaeta ikkaseta	ikkasen	S
8	melt	toke-	toku?	toketa	token	tok-as(e)-	tokasu?	toketa tokaseta	tokasan tokasen	C
9	stop	tom-ar-	toma?	tomatta	toman	tome-	tomu?	tometa	tomen	A
10	turn	mawar-	mawa?	mawatta	mawa:n	mawas(e)-	mawasu?	maeta	mawasan	E

11	dissolve	toke-	toku?	toketa	token	tok-as(e)-	tokasu?	toketa tokaseto	tokasan tokasen	C
12	burn	jak-e-	jaku?	jaketa	jaken	jak-	ja?	eta	jakan	A
13	destroy	utgar-e-	ugg au?	ugg ^w aeta	ugg ^w aen	utgar-	ugg a?		ugg ^w a.n	A
		utgare-	ugg au?	ugg ^w aeta	ugg ^w aen	utgar-as(e)-	ugg a:? ugg a:su?	ugg ^w a:eta	ugg ^w asan ugg ^w asen	C
14	fill	utkuzue-	ukkuzu:?	ukkuzieta	ukkuzuen	utkuz(e)-	ukkuzusu?	ukkuzia		E
		mitir-	mitci?	mitetta	mitcian	mit-as(e)-	mitas mitasu?	mitaeta	mitasan	C
15	finish	owar-	owa?	owatta	owa.n	owar-as(e)-	owa:su?	owa:eta owa:seta	owa:sen	C
		sum-	sun	sunda	suman	sum-ase-	sumasu?		sumasen	C
16	begin	hatm-ar-	habma?	habmatta	habma:n	hatme-	habmu?	habmeta	habmen	A
17	spread	hiog-ar-	çioğa?	çioğatta	çioğa.n	hioge-	çioğu?	çioğeta	çioğen	A
18	roll	koogar-	ko:ğa?	ko:gatta	ko:ğa.n	koogas(e)-	ko:ga? ko:ğasu?	ko:ğeta	ko:ğasan ko:ğasen	E
19	develop	sakae-	sakau?	sakaeta	sakaen	sakae-sas(e)-	sakaesasu?	sakaesacta sakaesaseto	sakaesasen	C
20	get lost/lose	ne got nar-	ne go? na?	ne go? natta	ne go? na:n	ne got nar-akas(e)-	ne go? na:ka? ne go? na:kasu?	ne go? na:keta	ne go? na:kasan	C

21	rise/raise	ag-ar-	aga?	agatta	aga.N	age-	agu?	ageta	agen	A
		ju nar-	ju na?	ju natta	ju na.N	ju nar-akas(e)-	ju na.ka? ju na.kasu?	ju na.keta	ju na.kasan	C
22	improve	ju nar-	ju na?	ju natta	ju na.N	ju s-	ju su?	ju eita	ju sen	S
		zjozi nar-	zozu na?	zozu natta	zozu na.N	zjozi nar-akas(e)-	zozu na.ka? zozu na.kasu?	zozu na.keta	zozu na.kasan	C
23	rock	jue-	ju?	jueta	juen	ju-akas-	juaka?	juaketa	juakasan	C
24	connect	tunag-ar-	tsunaga?	tsunagatta	tsunaga.N	tunage-	tsunagu?	tsunageta	tsunagen	A
25	change	kaw-ar-	kawa?	kawatta	kawa.N	kawe-	kaw?	kaeta	kaen	A
26	gather	atm-ar-	abma?	abmatta	abma.N	atme-	abmu?	abmeta	abmen	A
27	open	ak-	a?	eta	akan	ak-e-	aku?	aketa	aken	C
		hittjabur-e-	çitteabu.?	çitteabueta	çitteabuen	hittjabur-	çitteabu?	çitteabutta	çitteabuan	A
28	break	war-e-	wau?	waeta	waen	war-	wa?	watta	wa.N	A
		tunbor-e-	tumbou?	tumboeta	tumboen	tunbor-	tumbo?	tumbofta	tumboan	A
29	close	sim-ar-	eima?	eimatta	eima.N	sime-	eimu?	eimeta	eimen	A
30	split	wak-ac-	wakau?	wakaeta	wakaen	wake-	waku?	waketa	waken	A
		kesim-	keein	keemda	keeman	utkoos(e)-	ukko.?	ukkoeta	ukko.san	S
31	die/kill	sim-	ein	einda	einan	koos(e)-	ko.su?	koeta	ko.san	S

Transitivity Pairs in the Hayato Dialect of Kagoshima

Japanese

TAKI Ryuichi

taki.ryuichi.0816@gmail.com

Keywords: Kagoshima Japanese, Hayato dialect, morphophonology, morphology, transitivity pairs

Abstract

In this paper, I report about transitivity pairs in the Hayato dialect, which is spoken in Kagoshima prefecture. The Hayato dialect has three types of morphosyntactic operations for transitivity alternations; suffixation, stem-final phoneme alternation and root alternation (suppletion). It is revealed that 84.8% of transitivity alternations are realized by suffixation in this dialect. I also analyze the directions of derivation. The Hayato dialect has causative verbs, anticausative verbs, equipollent verbs and suppletive verbs. Types of verb stems can be determined mostly by the negative forms, which are morphologically more transparent than other inflected forms, except in the case that a verb has /s/ in the stem-final or stem-penultimate position.

(たき・りゅういち 東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員 DC／国立国語研究所)